



## ことしは1個人2団体に 我妻榮児童文化賞

8回目を数える「我妻榮児童文化賞」の表彰式が2月24日、市内のホテルサニールートで開かれました。この表彰は米沢児童文化協会（高森務会長）の事業で、文化活動の面で顕著な実績をあげた小・中学生の個人又は団体に贈られるもの。ことしの受賞者は、山形駅西口都心ビルに設置するアートチェアーのデザインコンペで最優秀賞を得た興譲小6年の羽生田芽依さんと三沢西部小の緑の少年団（全校生）・第四中の吹奏楽部（50人）でした。

この事業の起因は、榮先生が逝去される1年前の昭和47年2月11日に、米沢児童文化協会へ「何かの役に立ててください」と、ポンと10万円寄付されたことに依るもので、当時、財政面で苦しんでいた児文協では、大助かり。この報恩にと、平成6年2月からスタートしたものです。

# 我妻榮記念館

だより

## 第 2 号

発行日／2001年3月31日

発行／我妻榮記念館事務局

☎992-0045

米沢市中央3 1 38

TEL 0238 24 2211



舌が覚えている  
ふるさとの味

我妻榮記念館館長 松野良寅

小学唱歌の「ふるさと」に the sword.

「兎追いし かの山 こぶな (ペンは剣より強い 文は武約りし かの川」という一節に勝る) をある学生が

があります。その「兎追いし」 The penis is mightier

を《兎がおいしい》と思いい than the sword.

んでいたという話を聞いた覚えがありすが、「ぎん飯」より強い」と迷訳 思わず教師も苦笑したエピソードもあります。日みて直感的に判断するのも危険な場合があります。

ら兎も「おいしい」と聞こえたのでしよう。 明治時代B・H・チェンバを連れて帰宅した父が、玄関先から「酒だ、酒だ」と叫んでいながら、いざ酒の準備ができ、盃に酒が注がれたとたん、盃を捧げ持ったまま、こくりこくりと居眠りする父の姿を見た幼い時代の向田邦子が、「荒城の月」の「めぐる盃影さして」をてつきり「眠る盃影さして」と思いこんでいた思い出をエッセイ「眠る盃」に書いています。耳で覚えた記憶はあやふやですね。

The pen is mightier than

よね。「弘法も筆の誤り」の

質のミルク) 看板屋がBをPと書き間違えた欠作。「ペスト菌入りのミルク」などだれも飲みません

PEST MILK (最上をいくつかのせています。

した。そのなかに東京の街で見かけた看板の傑作(欠作?)

究して「一種の百科事典ともいえる『日本事物誌』を著しま

学校や東大で教え、日本の古典や言語・風俗習慣などを研

究して「日本事物誌」を著しま

断するのにも危険な場合があります。

と読みちがえて「ペニス

より強い」と迷訳 思わず教師も苦笑したエピソードもあ

ります。日みて直感的に判

断するのにも危険な場合があります。

# 我妻榮記念館と展示文書

唄 孝 一

「私が死んだ後に、誰かその方面に興味をもつ後進の学者が、これを整理して『我妻文書』などと呼び、公にする日があるかもしれない、などと考えたこともあった。しかし、翻って考えると、何も私の死を待つ必要はあるまい。生きていた間に、公表するかどうかは別としても、整理しておくだけの意味はありそうだと考えるようになった」(ジュリスト 一八六号、一九五九年九月一五日)

これは先生がお亡くなりになる十年以上も前にお書きになったものです。このようにして「我妻文書」整理の第一弾の作業として、先生みずから中心となられて、加藤一郎・立石芳枝(明治大学)両教授を顧問役に、私が幹事役をつとめ、利谷信義教授(東大社研)との共同作業として戦前の親族法相続法改正(これを途中から「人事法」と呼んだ)の整理が始まりました。



藤巻和広君と汗ダクの整理 平成5年8月

当時大学が紛争の前後であったこともわざわざいって、御生前には完了せず、御逝去後一年以上経って先生に捧呈された弟子たちの追悼論文集「私法学の新たな展開」(一九七五年)にその成果の一部を掲載するのが精一杯でした。(唄 利谷「人事法条」の起草過程とその概要)

こないきさつを御承知だったかどうかは分かりませんが、御逝去直後(昭和四十八年十月二十七日)、洋君(御長男、当時はピッツバーグ大学教授、その後カリフォルニア

ア大学・ロスアンゼルス校・筑波大学教授を経て、東京工業大学教授)から電話で「おやじのさまざまな文書、その他の資料等の後始末を二人でやろう」と私への呼びかけがありました。その必要性は私も十分わかっていました。そしてそれは前に申し上げたように、何よりも先生の御遺志におくればせながら応えるものです。もとより私個人にとつて誠に有り難い御仕事と思われました。しかし、いろいろの意味で私より適任者がおられると思われるし、その任の重さも思い、しばらくためらっていたのですが、四宮和夫教授(当時東大の民法主任教授)からも力強いお勧めがあり、さんざん迷ったあげく私はお引き受けしました。

しかし、この仕事は決して容易なものでないことは、皆さんの御推察の通りです。というのは、先生の圧倒的な研究業績を思えば、そのプロセスにおける資料や材料はいかばかり膨大なものか、想像の及ばないところです。まことに先生は、学界や研究会の指導者としてのほかに、民法改正をはじめ数多くの立法に参画され、さらに行政的・社会的な各種団体にも参加し活躍されています。しかも、いかなる会合にも手をぬくことなく熱心に参加される先生は、その御活動に関連する資料・文書などを丁寧に保存されていました。それらは、学術研究上はもとより、立法作業や各種社会的活動にとつても有益な資料たりうるものに違いないのです。そのほか、ご家族との写真、旅の記録、折にふれての御書簡など、私生活にわたるものの中にも、先生のあの「一懸命の生涯」を支えた活力として、あるいはいろどりとして、みる人を励まし、またうるおわせるものも少なくないでしょう。これらを整理し、室に集めて陳列することは、私がひそかに抱いていた理想でした。

平成になり「我妻榮記念館」の話が具体化し、同四年にスタートしたことは、そのための絶好の場を得たことを意味します。

もつとも、その頃は既に御明治版。床屋の看板にHEAD CUTTERというのがあるたそうです。「頭」が「髪」の意味で使われていたことにもよるのでしようが、日本語を逐語訳するととんでもない迷訳が發明されます。世界共通語になった柔道の用語のよいうに、日本語をそのまま用いる方が理にかなう場合が多々あります。

それと対照的に、日本語(漢字)で十分表現できるものを、何でもあちら風にかタカナ表記するのはどういうものでしょうか。

「あら、そのブレザー、アラモードね」と言われたある中年女性が、当意即妙、「あらどうも」と言い返した話などは、ウィット、ユーモアの典型と言えるでしょう。

戦前、昭和十年台までは、米沢市街地の小川にもアヒルがたくさん泳いでいたものです。我妻先生は、正月料理に欠かせなかったアヒルを具にした雑煮の味が忘れられず、東京でもアヒルを買って来て雑煮を作ってみたが、幼いこ

△前ページに続く▽

### 来館者日誌から

- ▶12年 4月24日 仙台裁判所々々長 外3名
- ▶5月4日 山形地方検察庁検事 外1名
- ▶5月11日 高島中学校2年生 6名
- ▶5月20日 先人顕彰会幹事会 10名
- ▶5月30日 仙台検察庁長官 外6名
- ▶6月18日 白根奨学生親子我妻先生に学ぶ 20名
- ▶8月1日 山形検察庁検事正 外6名
- ▶8月3日 山形検察庁次席検事 外2名
- ▶8月8日 山形法務局長 外3名
- ▶9月22日 我妻榮名誉館長来訪
- ▶11月15日 山形検察庁検事 外3名
- ▶13年 2月13日 仙台法務局長 外3名
- ▶3月2日 仙台検察庁検事 外3名

### 12年度 火種塾

隔月の第一日曜日、朝7時から1時間程度、火種塾主催の学習会が開かれています。以下は12年度のものです。

- 12年 5月7日 松野良寅氏 25名  
「米沢藩ではなぜ興譲館のほかに洋学会を設立したか。」  
「ダラスの論文 米沢方言」
- 7月2日 香坂昌志氏 22名  
「米沢方言について」
- 8月4日 子供火種塾  
大人 16名 子供 20名  
「米沢の町づくり」小林和夫氏  
「日本の名君 上杉鷹山」志摩健一氏
- 9月3日 安部三十郎氏 17名  
「開拓農民の指導者、高橋鑑一」
- 11月5日 佐野清一氏 20名  
「米沢の産業」
- 13年 1月14日 小野 榮氏 15名  
「上杉鷹山公の食生活」
- 3月4日 川島良博氏 10名  
「郷土の音楽家、大沼 哲」

米沢有為会 我妻記念館 ホームページ

<http://www-1.ocn.ne.jp/~yuukai/index.html>

逝去後二十数年経っていましたが、適切な陳列品が果たして集まるのかどうかという懸念もありました。

図書的大部分は東京大学法学部に寄贈され、また資料も大部分は同学部付属の近代立法過程研究会（現在は、近代日本法政史料センター）に整理保管されています。その一部のアジア関係資料は東大東洋文化研究所に保管されています。

さらに、ずっと後になり平成にかかる頃、山形県立図書館に県人文庫が設置されました。先生はもとより偉大な県人の一人に選ばれ、当時の館長さんは熱心に上京をくり返して、御遺族や私たちの手もとから、わずかに残っていた

もの運ばれました。以上のようなわけで、記念館の開設の頃、いくつかの組織の配慮と責任者の御努力の成果として我妻文書は既に分散保管されていたのです。それぞれもろろん結構なことではあるのですが、もし記念館がもつと早く計画されていたら、すべてをここに集中保管されていたであろうに、という思いも全くなくはありませんでした。その意味では、御逝去後二十年経てからの記念館づくりは、かなり困難かと危ぶまれました。

しかし、先生の場合、資料などが軽井沢や真鶴の別荘に分散されていたことが幸いしました。その後もぼちぼちあちこちから、文書や遺品が発見され続けていました。ただ何より残念だったことは、記念館の話が出た頃、洋君は病に倒れ他界されていたことです。そこで、その後は皆様おなじみの堯君と相談しながら、残っていた資料や遺品を、記念館に極力集めることに全力をあげました。藤巻和広君はそんな私の微力を補って存分の協力をしてくれました。そして先生の御生誕百年の記念式（一九九九年十月二十五日）をとりあえずの目標として、何とか形をつけることができました。一部は市民ギャラリーにも陳列し、当日を迎えることができました、という次第です。

ここで陳列品の目録や解説をご披露すべきところですが、紙面の都合上それはまたの機会にいたします。そして例えば、陳列品の中心をなしている「民法講義」の生原稿などは、先生のお仕事と関連づけて味わう必要がありますが、そのあたりは宿題といえます。今回は、開設当時の事情などにつき、ほんの概略を申し上げて責をふさぐ次第です。陳列・整備をもつともつと進めるべき課題は残ったままです。「長く険しい道」といわれた先生の太いたしかな足どりに頭を垂れつつ、このリポートを一先ず閉じさせていただきます。

（はい こういち氏 東京都立大学 名誉教授・北里大学名誉教授）

る舌が覚えている「鉄砲屋町のアヒルの味」は出なかつたそうです。

伊東忠太博士は、弁当のおかず詰めてもらった「イナゴ」に郷愁を感じ、宇佐美勝夫さんは「ゼンマイと焼き豆腐の煮物」を酒の肴の絶品と懐かしまりました。世界各国の料理を楽しまれた先輩たちも、晩年にはひとしく「ふるさとの味」に回想しておられます。

昔の少年、昨日までの青年も、齢を重ね還暦だ古希だと呼道をあえぐ頃ともなると、食べ物への趣向も変わり、先輩たちもそうであつたように「冷や汁」「柿の胡桃和え」「ゆき菜づけ」といった米沢の味に回想して行く宿命のようなものを感じさせられます。

耳や目の聴覚・視覚は当てになりませんが、舌が覚えた味覚だけは、あの世行の雲に乗るまでついて回るような気がします。

我妻榮記念館の開館日  
毎週火・木・金曜日  
午前10時～午後4時  
TEL 〇三三八一-二四一三三三  
管理人 神田君一（自宅 三三六八五）

我妻榮記念館の開館日  
毎週火・木・金曜日  
午前10時～午後4時  
TEL 〇三三八一-二四一三三三  
管理人 神田君一（自宅 三三六八五）

# 米沢を訪ねて

前略

米沢の空は意外に広くそして高い。駅舎を出て広場の歩道に立つて最初に感じたのが明るさであった。もちろん高いビルなどの視界を遮る障害物が無い事もその所以かもしれないが、あの屏風のように連なっていた青妻連峰の向こうにこんな開けた米沢盆地を想像出来なかつた。昼食は「米沢そば」米沢行きを九州で決めたときから考えていた。上杉郷山が荒れ地でも比較的簡単にしかも年一回収穫出来る。そばを栽培植物として盛んに奨励した。少し町外れに十二代続いているそば処がおいしいうがイダフツクに載っていた。

駅のロッカーにひとまず荷物を預けて車で蕎麦屋へ急いだ。昼の盛りを少し過ぎていて入口近くに席は取れた。茶を運んで来た辯姿の女子店員に店のおすすすめを頼んだ。割子そば風である。五段の器のそばとは別に、同じ五段の器にえび天、やまいもとうずらの卵、だいこんおろしの上にかつを節、そしてまぐろのさしみが別々にはいつている。店構えも味も一流であった。大食漢には少し物足りない。そこでざるそばを追加した。運んできたのは作務衣姿のご主人らしき人であった。

「おいしいですね」と私  
「有り難うございます。最後はざるそばですか。」  
「ご主人は口もとに微かなほほえみを残して退いた。  
「熱い蕎麦湯に取り替えます。」  
漆塗りの四角い蕎麦湯入れを、新しいのに取り替えて下がるうとしていたご主人に、

「柔沢の夜で、お酒と料理の美味し  
い所を覚えて頂けませんか？」  
ご主人の穏やかな微笑みに甘えてしまった。

「米沢ははじめてで？」  
「今、着いたばかりです。」  
「そうですね、そうですね。」  
「そば一杯に立ち寄った通りすがりの観光客に、ご主人は真剣な表情で考えながら、  
「おこのみは？」  
「いえ、なんでも。」  
「そうですね、じゃあ、私も時々行く店ですが、お一人でしたらカウンターになりますか？」  
「そのほうが落ち着けます。」  
「では。」

ご主人は、レジの後ろの部屋へ入り小さな米沢の地図を持って戻って来た。  
「ここが、今いるところですよ。」  
表情と同じで口調もほくとつとして穏やかである。

ご主人におしえてもらったお店は米沢牛も出す小料理屋であった。十二代も続いている老舗のご主人に、おいしいう店を紹介して頂いた事は、大げさではなくこの小旅行の主たる目的は達したも同然であった。

その小料理屋は、このそば屋からそんなに遠くはないようなので、先を急ぐ旅でもなし下調べのつもりで歩くことにした。

目的の上杉神社もここから、三キロのところのようだし、そば屋の

ご主人に頂いた案内図の方向を立ち止まって詳しく確認しているうちに私は、仰天した。

「我妻榮記念館」と小さな活字が観光地図の中で控えめに印されているではないか。

記念館の場所は今立っている所からそんなに遠くはない。地図の中の建物の名前を現在地で確認すると、この辻のもう一本向こうの辻を行へ曲がればすぐの苦である。

興奮気味で足早になるのを抑えながら角を曲がった。しかし、それらしい建物は見当たらない。人通りも殆ど無く高い建物もない。小さな自動車場の修理工場があり空地のその向

## 予期せぬ出会い

福岡県春日市

福山 漢山

## 我妻榮記念館

こうに仕舞屋が四五軒あるだけで、尋ねようにも家に人の気配もない。地図を確認しながら歩き続けていると、道路脇に駐車場のような広場があり、その奥に界隈には不似合いな建物がある。九州人の私どもには余りなじみは無いような家で、北海道旅行で海岸などの、漁港で見かけたニシン館を極端に小さくしたような、トタン屋根に板張りの壁で、築百年は経っているようにおもえる貧寒とした物置のような建物がポツンと残っている。

我妻榮という名前を知ったのはもう四十年近くも昔になる。法政大学で、二年の頃で、法学、殊に民法では神標的な存在で、伝統的な法律学に社会学的な法を取り入れた。我妻

民法体系」を作りあげたことで法学部の学生達にとつては尊敬する大学者であったが、一般的に我妻榮の名前を有名にしたのは、一九六〇年、いわゆる六十年安保闘争の元凶と言われた首相岸信介と対峙した時であった。

我妻榮と岸信介は、時の東京帝國大学法学部の同級で首席を競う好敵手であったが、その後の歩いた道は極端に違った。権力と野望そして狡知に走る政商岸信介、彼の周囲にはいつも利権が付き纏い、A級戦犯で裁かれた筈なのにいつの間にか政権の頂点に立つており、彼を昭和の妖怪と呼ぶ。他方我妻榮は囑望されて大学に残り教授の推薦で、三年欧米に留学し、帰国後は若くして教授となり、民法総論をはじめ数多くの著作を刊行され、昭和二十年、戦後最初の東大法学部長に就任した。爾来昭和三十三年の退官まで地道な学者として活躍し、その後も日本の法曹界を常にリードしていた。

その二人が、日米安保条約批准で大きく揺れる昭和三十五年六月、対決した。

政治は空転しデモ隊は連日のように国会に押し寄せ、「安保反対」を絶叫し世の中が物情騒然となる中で、我妻榮は、六月七日朝日新聞一面トップに「岸信介君に与える」と題した手記を載せた。先生は不穏な社会情勢の中で、安保反対運動が燎原の火のように燃え広がり、安全保障条約という条約論の原点を離れて、岸内閣を倒せ運動になり、アメリカ帝國主義反対へと展開し、革命も囁かれるような一触即発の状況の日本が無政府状態に陥るのではないかと、の危機を抱き、その危機意識が手記を書く決心をさせたのではないだろうか。

文面は、世の識者一般の覚醒を促し、対岸の火とせず前向きに冷静に解決するように願ひ、親友の、国の首相岸信介に對しては、過去の足跡を反省して政治から身を退き、しばらくは、「魚を釣つて暮らそうじやあないか」と語りかけた。

その気概と見識の見事さは、当時の学生たちに勇氣と未來への展望を与えた。そんな記憶が、米沢の一人旅で観光地図を辿っているうちに甦ってきた。

館内の蔵書や直筆の原稿や、壁に飾つた数多くの写真などを拝見して外へ出た。

初冬の昼下がりの弱い日ざしが、我妻榮の生家の記念館にやさしく降りそそいでいる。

今から八十五年前、米沢中学を首席で卒業した少年は上京し、高から東大へ進んだ。その同じコースに長州・山口から上京してきた岸信介がいた。

お互いに学を究めて首席を競つた。でも行く先はおそろしく違った。学者と妖怪、そんな単純な区別をしたら我妻先生は怒るかもしれない。しかし安保闘争が風化しつつある今、その場に青年として立ち会つた者から見れば天と地の差以上の違いは二人にはあった。

国会南通用門のあの激突から来年で四十年、すでに二人は鬼籍の人である。

錆びたトタン屋根、朽ちかけた板壁、路傍の片隅で風雪に耐えてきた建物の前で、私は重い記憶を辿りながらしばしば立ち尽くしていた。

（一九九九年十一月二十日）  
（春日市春日原北町二二二）

以下略